

# フランス語の単純未来形と条件法

## —叙法的対立とその源泉—

渡 邊 淳 也

### 1. はじめに<sup>1</sup>

この論文は、形態、意味ともにある程度類似している、フランス語の単純未来形と条件法の機能と用法の差異について、それらの形式の通時的変遷や、ほかのロマンス語との対照もふまえながら明らかにすることを目的とする。両形式の差異の特徴は、両形式がフランス語において独特の意味変化を経たことの結果として理解できる。

以下の論述は、つぎのような手順からなっている。まず2節で、単純未来形と条件法の起源と、その形式・機能の通時的変遷についてまとめる。3節でフランス語における単純未来形、条件法の差異の特徴を確認するとともに、両形式の使い分けが大きく異なるスペイン語との対比する。4節ではフランス語の条件法を統一的に理解するための鍵となる「言説の他者性」の概念を導入するとともに、その有効性を検証する。他のロマンス語との対比についても確認する。5節ではフランス語の単純未来形はモダールな機能が衰退しており、なによりも時制的性質に貫かれていることを示す。

### 2. 通時的変遷

フランス語、ならびにロマンス諸語におけるこれらの形式と機能の通時的変遷については、Fleischman (1982), Novakova (2001), Bourova et Tasmowski (2007), 渡邊 (2009 b), (2014 a), Patard (2017), 小林 (2019), 菅田 (2019) など、つとに多くの先行研究がある。しかし、統計的なコーパス調査にもとづいて実証的に変遷があとづけられるようになったのは比較的最近であり、Bourova et Tasmowski (2007), Patard (2017) がその代表的な成果である。以下では、それらの知見もまじえて、単純未来形と条件法の起源と、その形式・機能の変遷についてまとめておきたい。

古典ラテン語にはロマンス諸語とは異なる単純未来形が存在した。しかし、そのうちの3人称

<sup>1</sup> この論文は、2019年5月25日、成城大学でひらかれた日本フランス語学会2019年度シンポジウムで本稿筆者がおこなった招待講演の内容をもとにしている。同学会の学会誌『フランス語学研究』には、要旨のみ掲載されるため、意をつくした形でこちらに投稿するものである。また、本稿は、科学研究費(JSPS Kakenhi) 基盤研究(B) 課題番号 JP-18H00667「ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト・モダリティ・エビデンス・シャリティの対照研究」(研究代表者: 山村ひろみ)、および同基盤研究(C) 課題番号 JP-17K02804「日英語ならびに西欧諸語における時制とその関連領域に関する発展的研究」(研究代表者: 和田尚明) の助成をうけて行なわれた研究の成果の一部である。

単数 *cantabit* ならびに 1 人称複数 *cantabimus* が、それぞれ単純過去形 *cantavit*, *cantavimus* とまぎらわしく、民衆に忌避された。それにかわって、後期ラテン語では、*habere*, *debere*, *velle* などの助動詞を用いた迂言形が用いられるようになった。ロマンス諸語にみられる単純未来形は、＜本動詞の不定法＋助動詞 *habere*＞からなる迂言形を起源としており、かつ助動詞が不定法の語尾に癒着し、ひとつづりの形態と化したこと（このことを総合化 *synthétisation* という）によって成立したものである。その迂言形には、*habere* の時制に応じて変異があった。なかでも (1) にみるような変異が、こんにちのおもなロマンス諸語における単純未来形、条件法の源泉になっている。

# (1) *habere* を用いた迂言形

- (i) 後期ラテン語 *cantare habeo* (動詞不定法＋助動詞 *habere* の現在形) ⇒ フランス語の単純未来形 *je chanterai*, スペイン語の単純未来形 *cantaré*, ポルトガル語の単純未来形 *cantarei*, イタリア語の単純未来形 *canterò* の起源
- (ii) 後期ラテン語 *cantare habebam* (動詞不定法＋助動詞 *habere* の半過去形) ⇒ フランス語の条件法現在形 *je chanterais*, スペイン語の条件法現在形 *cantaría*, ポルトガル語の条件法現在形 *cantaria* の起源
- (iii) 後期ラテン語 *cantare habui* (動詞不定法＋助動詞 *habere* の単純過去形) ⇒ イタリア語の条件法現在形 *canterei* の起源 (ただしイタリア語でも方言によっては (ii) に由来する形 *cantaria* もある。cf. Rohlfs 1966-1969, vol.2, pp.339-349)

本稿では、フランス語に存在する (1) の (i)、(ii) のあいだの対比を問題とする。

*habere* を用いた迂言形の、連続したつづり字 (*graphie soudée*) での初出は 7 世紀であるが、体系的な出現は 842 年『ストラスプールの宣誓』*Serments de Strasbourg* からである。

当初、*habere* を用いた迂言形は、いずれも義務や必然性のモダリティ (*Bourova et Tasmowski 2007* のことばでいうと、真理的必然性 *nécessité aléthique*) をあらわす形式であった。また、*cantare habeo* 型形式、*cantare habebam* 型形式のあいだに固有の差異はなく、現代語でたとえるならば *je vais chanter*, *j'allais chanter* の違いと同様、「おなじ迂言形」として構成原理で理解できるものであった。(2)、(3) はいずれも 4 世紀の例であるが、(2) は現在時、(3) は過去時に視点がおかれていることがそれらのあいだの相違点であって、いずれも視点のおかれる時点からみた必然性をあらわすという点は共通している。

- (2) *Mortem timetis : quid timetis? ventura est : timeam, non timeam, venire habet; sero, cito, ventura est.* (Augustinus Hipponensis, cité dans Bourova et Tasmowski 2007, p.31)  
きみは死をおそれている。なにをおそれることがあろう。死は来るのだ。おそれようが、おそれまいが、かならず来るのだ。おそかれ早かれ、死は来るのだ。
- (3) [...] *saginitus carnem domini figurabat, quae ab incredulis filiis carnis abraham propter salutem credentium immolari habebat [...]* (Gregorius Iliberritanus, cité dans Patard 2017, p.115)  
いけにえの子羊は神の血肉を体していた。その血肉は、信者の祝福のため、アブラハムの血肉をもつ不信者の子らによって屠られることになる。

また、小林（2019, p.340）の説によると、『ストラスブールの宣誓』にみられるつぎのような形も、義務の表現と解する余地があるという。しかしこの例では、むしろ「誓い」という言語行為が前面に出ているため、「義務」という解釈は、それ自体では見さだめづらい。

- (4) Pro deo amur et pro christian problo et nostro commun saluament d'ist di en auant, in quant Deus sauir et podir me dunat, si **saluarai** eo cist meon fradre Karlo, et in aiudha et in cadhuna cosa, si cum om per dreit son fradra saluar dift, in o quid il mi altresí fazet, et ab Ludher nul plaid nunquam **prindrai** qui meon uol cist meon fradre Karle in damno sit. (Serments de Strasbourg)

神の愛にかけて、そしてキリスト教徒と、我らの共通の救いにかけて、今日より先、神が私に智恵と力を与えてくれる限り、私は、私のこの弟シャルルを援助によって、そしてあらゆることについて、人が当然の義務によって自分の兄弟を守らなければならないのと同様に、彼が私に同じようにすることを条件としてではあるが、助けるものである。そしてロテールとは、私の意志により、わが弟シャルルに害になるような協定を決して結ぶことはしない。

当初は目立った差異のなかった *cantare habeo* 型形式と *cantare habebam* 型形式のそれぞれの意味が、ロマンス諸語で異なる発展をとげた結果、現代語でかなり違った用法を示すようになった。

渡邊（2009 b）,（2014 a）でものべたように、フランス語では、*cantare habeo* 型形式の意味はほとんど未来時制化の一途をたどった。とくに現代フランス語では、(5')、(6') にみるように単純未来形のモデルな用法は衰退しているか、存在しない。(5) のスペイン語の単純未来形の現在推量用法の例をフランス語に翻訳しようとする、(5') のように、単純未来形ではきわめて不自然であり、準助動詞 *devoir*、*pouvoir* を用いることが多い。また、(6) のイタリア語の例にあるような、単純未来形の譲歩用法をフランス語に翻訳するとき、(6') のように、単純未来形は排除され、副詞 *peut-être* を付加することが普通である。

- (5) Estoy pensando en lo que **dirán** los ingleses a estas horas — dijo.  
「あのイギリス人たちがいまごろ言っているであろうことを考えている」と彼は言った。  
(Miguel Delibes, *El camponeato*, cité dans Barceló 2006, p.4)
- (5') Je pense à ce que les Anglais {??**diront** / **doivent dire** / **peuvent bien dire**} en ce moment, dit-il.  
(Barceló, ad loc.)
- (6) — Studio, scrivo, lavoro anch'io. — Beh, **studierai**... ma il lavoro vero lo facciamo noi.  
「研究して、書いて、私も働いている」「まあ、きみも研究はしているかもしれないが、本当の仕事はわれわれがしている」  
(Alberto Moravia, *Racconti romani*, cité dans Barceló 2006, p.5)
- (6') — J'étudie, j'écris, je travaille moi aussi. — Bah, {**peut-être que tu étudies** / **tu étudies peut-être** / **\*tu étudieras**}, mais le vrai travail c'est nous qui le faisons.  
(Barceló, ad loc.)

一方、cantare habeo 型形式の未来時制化と役割分担するかのようになり、cantare habebam 型形式の意味は叙法的なものになった。その発端は、(7) にみるような、条件文の帰結節で用いられるようになったことである。

(7) **Sanare te habebat** deus per indulgentiam, si **fatereris** [...]

(Augustinus Hipponensis, cité dans Patard 2017, p.115)<sup>2</sup>

神は寛大さによってきみを癒やすだろう [cantare habebam 型迂言形]、もしきみが信仰告白するなら [接続法半過去形]。

この用法でも cantare habebam 型形式には必然性の意味があった。ここでいう必然性は、「仮定節の条件が満たされれば、帰結節の内容はかならず起きる」という、関係の必然性のことである。しかし、時代をくだるにつれて、仮定節から帰結節に不確実性が転移することにより、条件法自体で不確実性の意味を帯びようになり、さらには単独節でも条件法が不確実性の意味で用いられるようになった。実際、Patard (2017, p.117) のコーパス調査によると、古フランス語では仮定節・帰結節が明示される構文での使用が最多であったのに対し、現代フランス語では条件法が示されていない事例が最多であることがわかっている。

(3) のような過去からみた必然性をあらわす用法が時制的用法（間接話法など）の母胎になり、(7) のような条件文で帰結をあらわす用法が不確実性をあらわす用法の母胎となった。前者からは 16 世紀以降伝聞用法が派生し、後者からは（不確実性用法が仮定節から自由になるにつれて、徐々に）語調緩和用法が派生した。(8) は初期の伝聞用法の例である。太字にした条件法過去形 **auroient perdu** は、où にはじまる比較的独立した関係節のなかにあるため、冒頭の **on nous a écrit que...** のあとの補足節に属しているか否か、微妙な例である。したがって、独立節での伝聞用法の萌芽を見てとることもできよう。

(8) **On nous écrit que les Turcs ont esté n'aguères défaits par les Moscovites en deux batailles : où les premiers auroient perdu** soixante & dix mille hommes.

(Gazette 109, le 7 septembre 1641, cité dans Patard 2017, p.119)

最近、トルコ人たちはモスクワ人たちに潰滅させられたと書かれた便りが来た。そこでは、トルコ人たちは、7 万人を失ったという。

一方、(9) は語調緩和用法のもとになったタイプの例である。この例においても、**se (si)** 節がヴィルギュルを介して後置されていることから、独立節用法への地歩をふみだしていると考えることができる。

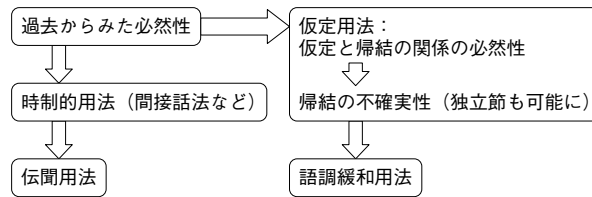
(9) **La, voldroie**, fet il, aler, a l'ermite, se ge savoie tenir le santier et la voie [...]

(Chrétien de Troyes, *Perceval*, cité dans Patard ad loc.)

<sup>2</sup> Patard (2017) は、この例を *Caesarius Arelatensis* に帰しているが、誤りと断じて訂正した。

もしわたしが道を正しく行けるなら、隠者のもとへ行きたいものだ（1 人称単数の主語を省略）、と彼は言った。

本節のまとめとして、cantare habebam 型形式の現代フランス語にいたるまでの意味・用法の拡張と、各用法の継承関係を図説すると、つぎの〈図 1〉のようになる。



〈図 1：cantare habebam 型形式の意味・用法の拡張〉

### 3. フランス語での単純未来形・条件法の差異の特徴

以下ではさらに、現代フランス語における単純未来形、条件法の差異の特徴を見ておきたい。(10)、(11) にみられるように、単純未来形はその背景に仮定を前提としてもしなくても使えるが、条件法は仮定を前提とせずには使えないという特徴がある。

- (10) — Il **viendra**. — 彼は来るだろう [単純未来形]。  
 — Si quoi? — もし何なら？  
 — Il n'y a pas de *si*. — 「もし」なんてないよ。 (Martin 1983, p.133)
- (11) — Il **viendrait**. — 彼は来るだろう [条件法]。  
 — Si quoi? — もし何なら？  
 — \*Il n'y a pas de *si*. — \*「もし」なんてないよ。 (ad loc.)

このことから、Martin (1983) は、条件法（の一部の用法）は可能世界（monde possible）をあらわすのに対し、単純未来形は期待世界（monde des attentes）、すなわち可能世界のなかでも蓋然性が高いとして卓立された世界をあらわすという仮説を提出している。

さらに、Squartini (2004) はその延長で、つぎのような対話を引き、疑問と条件法、断定と単純未来形が共起していることを指摘するとともに、フランス語の条件法に「+ 疑念」という特性を付与している<sup>3</sup>。

- (12) — Qu'en pensez-vous, **serait-il** au bureau?  
 — どう思いますか、彼は研究室にいるでしょうか [条件法]。

<sup>3</sup> 本稿筆者の考えは Squartini (2004) とは異なる。のちほど 4 節で述べるように、疑問文が対話者に判断をゆだねることから介在してくる「他者性」が、条件法が生起する要因であると考えている。

— Non, il **sera** plutôt chez lui.

— いやむしろ、家にいるでしょう [単純未来形]。

(Schogt 1968, p.47)

このように、フランス語の単純未来形と条件法のあいだには、概略的には確信度の差異ともいうべき、叙法的な対立があるといえる。

それに対して、Squartini (2004) が対照した 4 言語（フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語）のなかでフランス語と対蹠的な位置にあるのがスペイン語であり、時制的要因によってふたつの形式を使いわけている。

- (13) Ernesto **tendrá** ahora unos cincuenta años (Cartagena 1999, p.2959)

エルネストはいま 50 歳くらいだろう [単純未来形]。

- (14) Ernesto **tendría** en aquel tiempo unos veinte años (ad loc.)

エルネストはあのころ 20 歳くらいだったろう [過去未来形]。

スペイン語では、推量をあらわす用法においても、現在時について語るには (13) のように単純未来形、過去時について語るには (14) のように過去未来形（フランス語の条件法に相当する形式）を用いる。

フランス語について (12) で見た、疑問文中であるがゆえに条件法におかれるという現象はスペイン語には見られず、(15) のように未来時制を用いる。

- (15) Yo decía : ¿**Estará** enfadado conmigo? (Togebly, 1953, p.127)

わたしは言っていた。「彼はわたしに怒っているのだろうか」 [単純未来形]。

そして、スペイン語で疑問文中に過去未来形が出るときは過去について語っているときに限る。(16) は過去時の事態に関する推測を過去未来形で述べている。

- (16) ¿Qué **haría** ella a tales horas? (ibidem, p.128)

あんな時間に彼女は何をしていたのか [過去未来形]。

スペイン語文法で近年一般的に使われている名称に、フランス語の条件法現在形に相当する過去未来形 (pos-pretérito)、条件法過去形に相当する過去未来完了形 (pos-pretérito perfecto) というものがあり、いずれも直説法の時制として扱われている。名称にまで時制的要因の重視があらわれているのである。

#### 4. 現代フランス語の条件法は「異なる連続性」を標示する

2 節で確認したように、条件法が元来「必然性」をあらわす迂言形に由来するとはいえ、現代フランス語ではもはや、条件法の意味の基底に「必然性」を想定することはできない。こんにちでは、条件法は（ほとんど）すべての用法で不確実性をはらんでおり、共時的な理解のしかたは

おのずから全くちがったものにならざるを得ない。本節では現代フランス語の条件法の機能について独自の見解を提出し、さまざまな用法に即して検証してゆきたい。

現代フランス語で疑問文で条件法が多く用いられるのは、条件法が、たとえば(17)に見られるように、発話者は断定できないことについて、他者に断定をゆだねる機能を果たすからである。

(17) Mais où on **irait**? Il est déjà tard... On va quand même pas coucher dans les dunes...

(scénario du film *Week-end à Zuydcoote*)

でも、どこに行こうっていうの? もう遅いわ ... まさか砂丘で寝ようっていうんじゃないでしょうね ...

この種の用法を、渡邊(1998), (2001), (2004), (2014 a) では(18)のような報道でよく用いられる用法と同様、「他者の言説をあらわす条件法」(conditionnel du discours d'autrui)と呼んだ<sup>4</sup>。(17)のような用法では対話者が、(18)のような用法では外在的な情報源が、「他者」の位置を占めている。

(18) Selon le quotidien *Liberté* de mardi, qui fait l'état de « sources bien informées », il [=le bilan du massacre] **serait** de 428 morts et de 140 blessés.

(*Le Monde*, le 14 janvier 1998, cité dans 渡邊 2004 a, p.175)

「よく情報に通じた情報源」をひきあいに出す火曜の日報紙「リベルテ」によると、虐殺事件のまとめは、死者 428 名、負傷者 140 人であるという。

(17) の条件法をとまなう疑問文の背後には、どこかに行こうとしている対話者の一連の意図が想定されており、その脈絡のなかではどこに行こうとしているのか、ということをたずねている。「他者の言説をあらわす条件法」という命名は、「言説」(discours)にも力点をおいている。「言説」は連続的なものであり、単独の内容としてではなく、一連の脈絡のなかの一環として条件法におかれた内容を示している。

(18) はアルジェリアのテロ事件の報道であるが、アルジェリアでの一連の報道から情報を抜き書きしたことから、やはり、情報源としては事件に関する一連の言説を背景にしている。

なお、(18) のような、報道文で用いられる他者の言説をあらわす用法に関しても、フランス語とスペイン語とのへだたりはたいへん大きい。報道文執筆の手引きから引用した、つぎのくだりにも見られるように、(中南米ではなく)スペインのスペイン語では、他者の言説をあらわす条件法は規範的に好ましくないものとされることがある。

« El uso del condicional en ese tipo de frases queda terminantemente prohibido en el periódico. Además de incorrecto gramaticalmente, resta credibilidad a la información. »

<sup>4</sup> したがって、2 節でみた「伝聞用法」より広い範囲を対象とする。

(*Libro de estilo de El País*, cité dans Kronning 2014, p.76)

この種の文での条件法の使用は、新聞では厳に禁じられる。文法的に不正確であるうえ、情報から信頼性を減じさせるからである。

疑問文での用法にもどると、もっとも条件法と親和性の高い疑問詞は *pourquoi* である。

- (19) — C'est une armée européenne avec un chef allemand pour presser le bouton, c'est ça que vous voulez?

— Pourquoi **serait-il** allemand? (Milner et Milner 1975, p.125)

— ドイツ人の長官がボタンを押すヨーロッパ統合軍、ということをお願いしたいのですか？

— なんでドイツ人なのですか？

こうした *pourquoi* は、対話者の発言を批判する、一種の修辞疑問である。しかし、字義的には疑問文なので、対話者がいかなる脈絡でヨーロッパ統合軍をドイツ人が統率すると言うのかをたずねている。その脈絡が、ここでいう「他者の言説」をなしているのである。

これまで見てきた狭い意味での他者の言説をあらわす用法だけではなく、広い意味では条件法全般が「他者の言説」をあらわすといえる。渡邊 (1998), (2001), (2004), (2014 a) では、「**条件法は、現行の発話文連鎖とは異なる連続性のなかに動詞事行を位置づける機能を果たす**」という仮説を提唱した。

いわゆる時制的用法（過去における未来をあらわす用法）を考えてみよう。

- (20) Le secrétaire aux Finances, Donald Tsang, a certifié que le dollar de Hong-Kong **resterait** fixé au dollar américain et le porte-parole du gouvernement chinois, Tang Guoqian, a estimé que la crise **serait** de courte durée. (*Libération*, le 29 octobre 1997)

香港財務長官の曾蔭権は、香港ドルは米ドルと固定相場を維持すると明言した。また、中国政府報道官の唐国強は、経済危機は短期間になると見積もった。

時制的用法の多くは、(20) のように間接話法の補足節で、時制の照応によって出てくる。間接話法の補足節は、他者の言説を伝えるものであり、狭義での他者の言説をあらわす用法と隣接する用法である。

つぎに、事実と反する仮想をあらわす用法。

- (21) Toute affaire que l'on me propose est mauvaise, car si elle était bonne, on ne me la **proposerait** pas.

(Maurois, *Bernard Quesnay*, p.6)

わたしに来る話は全部悪い話だ。というのも、もしよい話なら、わたしにはもちかけてこないだろうから。

このような用法では、*si...* 節があることにより、現行の発話文連鎖とは異なる連続性への移行



が果たされる。条件法は、その「異なる連続性」のなかに動詞事行を位置づける。

また、事実に反する仮想をあらわす条件法は、Togebly (1985, vol.2, p.390) のいう「夢の条件法」conditionnel du rêve と連続的である。

- (22) Nous **construirions** une maison, nous nous **aurions** un garçon et une fille à qui j'**apprendrais** à lire et à écrire. Nous nous **querellerions** à propos de leur éducation. (ad loc.)

わたしたちは家を建てて、男の子ひとりと、女の子ひとりを生んで、こどもたちにわたしが読み書きを教えるの。わたしたちはときどき、こどもたちの教育のことで言い合いをするの。

(22) では、現実から離れた連綿たる夢を条件法で語っており、「異なる連続性」の仮説とよく合致している。

最後に、語調緩和用法も、「異なる連続性」の仮説で説明できる。

- (23) On **dirait** que tu es malade. きみは病気のようだ。 (Confais, 1990, p.294)

- (24) Il **faudrait** qu'on fasse des courses. 買い物に行かないといけないね。 (ad loc.)

(23) は熟語的とされるが、代名詞 on の使用からわかるように、断定主体が不特定の主体にずらされており、その不特定の主体の言説にふくまれる内容を on dirait que... 以下で提示している。

(24) についても、「買い物に行かないといけない」と判断している主体は不特定であり、あえていえばだれもが依拠しうる「一般則」(を支える集団的審級<sup>5</sup>)である。「一般則」は「このような状況ならば買い物に行かないといけない」という因果関係のかたちをとっており、その因果関係の紐帯が「異なる連続性」をなしている。

ここで問題にしたのは、条件法がはらむ「ある種の他者性」であり、現実世界でだれが命題内容の源泉になっているか、ということではない。Dendale (2010) が提案している「受けなおしの条件法」conditionnel de reprise (25) と「推量の条件法」conditionnel conjectural (26) の区別は結果的な解釈のちがいにすぎず、条件法そのものの議論にとっては本質的でない考える。

- (25) Paul n'est pas là! **Serait-il** à Paris? (Dendale 2010, p.291)

ポールがいない！ パリにいるということか。

- (26) Paul ne viendra pas. Il **serait** à Paris en ce moment. (ad loc.)

ポールはこないだろう。いまはパリにいるそうだ。

(25) が発話者の推論に由来することはたしかであるが、本稿筆者の考えでは、その「推論」なるものこそが、発話者に固有に属しているものではなく、発話者に外在する一般的な論理の流

<sup>5</sup> Nölke (2009) が紹介する「スカンディナヴィア式言語学的ポリフォニー理論」(la théorie scandinave de la polyphonie linguistique, 略称 ScaPoLine) は、この種の集団的審級を ON とよんでいる (ibidem, p.92)。

れであるという意味で、広い意味での他者性をはらんでいる。

最後に、広い意味での他者性がいわばトリガーになって、条件法の生起をひきおこすことが、他のロマンス語との比較においても、フランス語のきわだった特徴であることを見ておきたい。山村科研コーパス<sup>6</sup>から、フランス語と他のロマンス語の対照において特徴的な例を引用する。

- (27) [仏] Sir Henry! Vous ne voulez pas dire qu'il y en **aurait** [条現] vraiment beaucoup?

[伊] Sir Henry! Non vorrete dire che... [対応個所なし]

[西] ¡Sir Henry! ¿No querrá usted decir que sí los **hay** [現] ?

[葡] Sir Henry! Não nos está a dizer que **há** [現], pois não?

[伯] Sir Henry! Não está querendo dizer que **existem** [現]?

[羅] Sir Henry, doar nu vreți să spuneți că **sunt** [現] atât de multe!

(山村科研コーパス # 2712)

サー・ヘンリー、[迷宮入りした事件は] けっこうあるとおっしゃるのではないでしょうね！

- (28) [仏] D'après elle, l'autre l'**aurait rejointe** [条過] et lui **aurait** délibérément **maintenu** [条過] la tête sous l'eau.

[伊] L'altra nuotatrice l'**aveva raggiunta** [大過] e l'**aveva tenuta** [大過] deliberatamente con la testa sott'acqua.

[西] La otra nadadora **se había acercado** [大過] a ella, según esta mujer, y deliberadamente le **sumergió** [単過] la cabeza debajo del agua.

[葡] A outra **nadara** [大過] até junto dela e, segundo a mulher, **mantivera** [大過]

<sup>6</sup> 山村科研コーパスとは、科学研究費（JSPS Kakenhi）基盤研究（C）JP-15K02482「現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究」（研究代表者：山村ひろみ）による共同研究の一環として作成された、ロマンス諸語ならびに英語の各言語約7万語のパラレルコーパスである。例文引用の末尾には文の通し番号（#）を示した。コーパスの作成にもちいられた原典は、つぎのとおりである。

・英語版（原作）：Agatha Christie, *The Thirteen Problems*, Harper Collins Publishers, 2002.

・フランス語版：Agatha Christie, *Miss Marple au Club de mardi*, Sylvie Durastanti 訳, Éditions de Masque, 2013.

・イタリア語版：Agatha Christie, *Miss Marple e i tredici problemi*, Lydia Lax 訳, Arnold Mondadori Editore, 1981.

・スペイン語版：Agatha Christie, *Miss Marple y trece problemas*, C. Peraire de Molino 訳, Delbolsillo, 2003.

・ポルトガル語版：Agatha Christie, *Os Treze Enigmas*, Maria de Fátima Saint-Aubyn 訳, Edições Asa, 2012.

・ブラジルポルトガル語版：Agatha Christie, *Os Treze Problemas*, Petrucia Finkler 訳, L & PM, 2015.

・ルーマニア語版：Agatha Christie, *Treisprezece probleme*, Cristina Mihaela Tripon 訳, București, Editura RAO, 2014.

例文提示では、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガルポルトガル語、ブラジルポルトガル語、ルーマニア語を順に [仏]、[伊]、[西]、[葡]、[伯]、[羅] と略する。また、つぎのような時制・叙法の略称を用いる（実際には言語によって異なる呼称があるが、フランス語の時制呼称にしている）。[現] 現在形、[複過] 複合過去形、[単過] 単純過去形、[大過] 大過去形、[条現] 条件法現在形、[条過] 条件法過去形。

deliberadamente a cabeça de Miss Durrant debaixo de água.

[伯] A outra **nadou** [単過] até ela e, de acordo com essa mulher, deliberadamente **segurou** [単過] a cabeça da srta. Durrant embaixo d'água.

[羅] Cealaltă femeie **a înotat** [複過] spre ea și, după spusele ei, **a ținut-** [複過] o în mod voit cu capul sub apă pe domnișoara Durrant. (山村科研コーパス #2399)

その女性によると、友だちの女性がデュラン嬢といっしょになり、彼女の頭を故意に水のなかにおさこんだそうです。

(27)、(28) では、いずれもフランス語だけで条件法が用いられていることが注目にあたいする。(27) は対話者に判断をゆだねる疑問文であるが、すでに提示した本稿の考え方では、対話者も広い意味での「他者」にあたる。(28) では、フランス語版で文頭の前置詞句 d'après elle 「彼女によると」によって、他者の言説への言及であることが明示されている。このように、「他者の言説」に言及する際、条件法が出やすくなるというフランス語の特徴があらわれているといえる。

以上、4 節全体を通して見てきたように、現代フランス語の条件法には、広い意味での「他者の言説」、すなわち、「現行の発話文連鎖とは異なる連続性」が見られるのであり、それが叙法的な諸用法の根柢をなしているといえる。

## 5. 現代フランス語の単純未来形の時制的性質

2 節で確認したように、現代フランス語では単純未来形のモデルな用法が衰退しており、譲歩用法など、ほかのロマンス語にみられる用法が存在しない。

(29) の Proust の文例のような現在推量用法は現代では衰退し、古風、または南フランス諸方言の変種とみなされる。

(29) Pour qui a-t-on sonné la cloche des morts? Ah! mon Dieu, ce **sera** pour Mme Rousseau.

(Proust, *À la recherche du temps perdu*, vol.1, p.84)

だれのために死者の鐘がなったのかしら？ あっ、まあ、ルソー夫人のためでしょうね！

こんにちの標準的フランス語では、単純未来形の現在推量用法にかわって、法的準助動詞 *devoir* の認識的用法が広く使われるようになった。*Devoir* は、本来は「必然性」をあらわしていたが、あまり根柢のない「当て込み」のような用法 (30) にも拡大使用されるようになった。

(30) Léa. Pfff, dis donc, ça **doit** être triste, hein, de vivre ici...

Blanche. Oh non! Tu sais, je me sens moins seule ici, dans un grand immeuble, que dans une petite maison, hein... (E. Rohmer, *L'Ami de mon amie*, p.25)

レア：[無機質の、近代建築の集合住宅にまねき入れられて] わあ、こんなところに住むのは寂しいでしょうね。

ブランシュ：そんなことないのよ。ほら、小さな家よりも、大きな建物のほうが、ひとり

ぼっちって感じがしないもの…

衰退した単純未来形の現在推量用法のなかで、こんにちでも比較的許容されやすいのは、発話時点では仮説的に述べるものの、のちには事実によって真偽が判明するような事態を述べる場合、すなわち、未来時における確認 (vérification future) の可能性が明確な例である。

- (31) Notre ami est absent : il **aura encore sa** migraine. (Grevisse 1993, p.1258, §.857)  
ともだちは欠席している。また例の偏頭痛だろう。

(31) の容認可能性を高める方向で作用しているのは、副詞 **encore** と所有形容詞 **sa** である。彼が習慣的に偏頭痛を遅刻や欠席の理由にしていることをうかがわせる。「遅れてくるかもしれないが、見ていろ、彼は今回もまた偏頭痛のせいだというだろうから」というぐあい、未来的な意味がいつそう強くなっている。フランス語の単純未来形の時制的性質の強さがあらわれているといえる。

## 6. おわりに

本稿では、フランス語の単純未来形と条件法について、それらの通時的変遷や、他のロマンス諸語との比較にも留意しながら論じてきた。現代フランス語の条件法の叙法性の基底に認められるのは、現行の発話文連鎖とは異質の連続性のなかに動詞事行を位置づける機能であるという仮説を提出した。また、現代フランス語の単純未来形は、モダールな用法が衰退しており、使用できる場合は何らかの形で未来時の視点が必要になるという点で、時制的性格が強くなっているとした。

なお、4 節の末尾で一端を紹介した、パラレルコーパスを用いた統計的観察と、そこに見られる具体的な実例にもとづいたロマンス諸語の単純未来形、前未来形の対照研究については渡邊・小川 (2018)、同様の条件法現在形、条件法過去形の対照研究については、渡邊 (2019) を参照されたい。

## 参考文献

- Álvarez Castro, C. (2007) : « Interprétation du futur du l'indicatif et représentation d'événements futurs », *Cahiers Chronos*, 19, pp.7-24.  
Anderson, E. W. (1979) : « The Development of the Romance Future Tense », *Papers in Romance*, 1, pp.21-35.  
Aoki, S. et I. Tamba (2000) : « Avenir, anticipation et catégorie linguistique du futur », *SCOLIA (Sciences Cognitives, Linguistique et Intelligence Artificielle)*, 12, pp.25-37.  
Authier-Revuz, J. (1995) : *Ces mots qui ne vont pas de soi, Boucles réflexives et non coïncidences du dire*, 2 vols, Larousse.  
Azzopardi, S. (2011) : *Le Futur et le Conditionnel. Valeur en langue et effets de sens en discours. Analyse contrastive espagnol / français*, Thèse, Université Paul Valéry - Montpellier III.  
Barceló, G. J. (2004 a) : « Guillaume et le futur roman : à propos du futur périphrastique », *Modèles linguistiques*, 25, 1-2, pp.169-178.  
Barceló, G. J. (2004 b) : « L'occitan e lo catalan : doas lengas bessonas? Un futur compromettent », *Linguistica*

- occitana*, 1, pp.1-12.
- Barceló, G. J. (2004 c) : « Lo(s) futur(s) occitan(s) e la modalitat : elements d'estudi semantic comparatiu », *Linguistica occitana*, 2, pp.1-10.
- Barceló, G. J. (2006) : « Le futur des langues romanes et la modalité : monosémie et dialogisme », *Cahiers de praxématique*, 47, pp.1-10.
- Barceló, G. J. et J. Bres (2006) : *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys.
- Bourova, V. et L. Tasmowski (2007) : « La préhistoire des futurs romans », *Cahiers Chronos*, 19, pp.25-41.
- Cartagena, N. (1999) : « Los tiempos compuestos », I. Bosque et V. Demonte (éds.) : *Gramática descriptiva de la lengua española*, Espasa Calpe, 2, pp.2935-2975.
- Caudal, O. (2012) : « Relations entre temps, aspect, modalité et évidentialité dans le système du français », *Langue française*, 173, pp.115-129.
- Celle, A. (1997) : *Etude contrastive du futur en français et ses réalisations en anglais*, Ophrys.
- Celle, A. (2006) : *Temps et modalité*, Lang.
- Confais, J.-P. (1990) : *Temps, mode, aspect*, Presses Universitaires du Mirail.
- Culioli, A. (1990) : *Pour une linguistique de l'énonciation*, 1, Ophrys.
- Curat, H. (1991) : *Morphologie verbale et référence temporelle en français moderne*, Droz.
- Damourette, J. et E. Pichon (1911-36) : *Des mots à la pensée*, 9 vols, d'Artrey.
- Dahl, Ö (éd.) (2000) : *Tense and aspect in languages of Europe*, Mouton de Gruyter.
- Dendale, P. (1993) : « Le « conditionnel de l'information hypothétique » : marqueur modal ou marqueur évidentiel? », G. Hilty (éd.) : *Actes du 20ème Congrès International de Linguistique et Philologie Romanes*, Francke, pp.163-176.
- Dendale, P. (2001) : « Le futur conjectural versus devoir épistémique », *Le français moderne*, 69, 1, pp.1-20.
- Dendale, P. (2010) : « *Il serait à Paris en ce moment. Serait-il à Paris?* A propos de deux emplois épistémiques du conditionnel », C. Álvarez Castro et alii (éds.) , *Liens linguistiques*, Peter Lang, pp.291-317.
- Dendale, P. (2013) : « Conditionnel, corrélation, incertitude. Quelques réflexions », C. Norén et alii (éds) *Modalité, évidentialité et autres friandises langagières*, Peter Lang, pp.61-79.
- Desclés, J.-P. (1995) : « Les référentiels temporels pour le temps linguistiques », *Modèles linguistiques*, 32, pp.9-36.
- Diller, A.-M. (1977) : « Le conditionnel, marqueur de dérivaison illocutoire », *Semantikos*, 2, 1, pp.1-17.
- Donaire, M. L. (1998) : « La mise en scène du conditionnel ou quand le locuteur reste en coulisse », *Le français moderne*, 66, pp.204-227.
- Fleischman, S. (1982) : *The future in thought and language*, Cambridge University Press.
- Forest, R. (1993) : « « Aller » et l'empathie », *Bulletin de la Société de linguistique de Paris*, 88, pp.1-24.
- Franckel, J.-J. (1984) : « « Futur « simple » et futur « proche » », *Le français dans le monde*, 182, pp.65-70.
- Gosselin, L. (1996) : *Sémantique de la temporalité en français*, Duculot.
- Gosselin, L. (2005) : *Temporalité et modalité*, Duculot.
- Gosselin, L. (2010) : *Les modalités en français*, Rodopi.
- Gosselin, L. (2018) : « Le conditionnel temporel subjectif et la possibilité prospective », *Langue française*, 200, pp.19-33.
- Grevisse, M. (1993) : *Le bon usage*, 13ème édition, Duculot.
- Guillaume, G. (1970) : *Temps et verbe*, Honoré Champion.
- 林田遼右 (1982) : 「条件法の諸問題」『千葉大学人文研究』11, pp.69-85.
- Imbs, P. (1960) : *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.
- 小林標 (2019) : 『ロマンスという言語』大阪公立大学共同出版会.
- Korzen, H. et H. Nölke (2001) : « Le conditionnel : niveaux de modalisation », P. Dendale et L. Tasmowski (éds.) : *Le conditionnel en français*, Université de Metz, pp.123-146.

- Kronning, H. (2014) : « Pour une linguistique contrastive variationnelle : le conditionnel épistémique d' 'emprunt' en français, en italien et en espagnol », I. Halland et alii (éds.) : *Affaire(s) de grammaire*, Novus Forlag, pp.67-90.
- Laca, B. (2004) : « Les catégories aspectuelles à expression périphrastique : une interprétation des apparentes « lacunes » du français », *Langue française*, 141, pp.85-98.
- Lebaud, D. (2012) : « Normal ou marginal? : Quelques emplois de l'imparfait de l'indicatif et du futur simple », Aoki, S., F. Dhome et D. Lebaud (éds.) : *Conflits et Interprétations*, dans la revue électronique *Inter Faculty*, 3, pp.173-194.
- Leeman-Bouix, D. (1994, 2002<sup>2</sup>) : *Grammaire du verbe français*, Nathan.
- Maingueneau, D. (1999) : *L'Enonciation en linguistique française*, Hachette.
- Mari, A. (2016) : « French future : Exploring the future ratification hypothesis », *Journal of French Language Studies*, 26, pp.353-378.
- Martin, R. (1983) : *Pour une logique du sens*, Presses Universitaires de France.
- Martin, R. (1987) : *Langage et croyance*, Margada.
- Milner, J. et J.-Cl. Milner (1975) : « Interrogations, reprises, dialogue », J. Kristeva et alii (éds.) : *Langue, discours, société*, Seuil, pp.122-148.
- Morency, P. (2010) : « Enrichissement épistémique du futur », *Cahiers Chronos*, 22, pp.197-214.
- Morency, P. et L. de Saussure (2006) : « Remarques sur l'usage interprétatif putatif du futur », *Travaux neuchâtelois de linguistique*, 45, pp.43-70.
- Nef, F. (1986) : *Sémantique de la référence temporelle en français moderne*, Peter Lang.
- Nølle, H. (2009) : « Types d'êtres discursifs dans la ScaPoLine », *Langue française*, 164, pp.81-96.
- Novakova, I. (2001) : *Sémantique du futur*, L'Harmattan.
- Patard, A. (2017) : « Du conditionnel comme constructions ou la polysémie du conditionnel », *Langue française*, 194, pp.105-124.
- Rocci, A. (2000) : « L'interprétation épistémique du futur en italien et en français », *Cahiers de linguistique française*, 22, pp.241-274.
- Rohlf, G. (1966-1969) : *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti*, 3 vols, Giulio Einaudi.
- Rotgé, W. (1995) : « Temps et modalité », *Modèles linguistiques*, 31, pp.111-129.
- Schogt, H. G. (1968) : *Le système verbal du français contemporain*, Mouton.
- Squartini, M. (2001) : « The internal structure of evidentiality in Romance », *Studies in Language*, 25, 2, pp.297-334.
- Squartini, M. (2004) : « Il Futuro e il Condizionale nelle lingue romanze », *Revue Romane*, 39, 1, pp.68-96.
- Squartini, M. (2008) : « Lexical vs. grammatical evidentiality in French and Italian », *Linguistics*, 46, 5, pp.917-947.
- Stage, L. (2002) : « Les modalités épistémique et déontique dans les énoncés au futur (simple et composé) », *Revue Romane*, 37, 1, pp.44-66.
- Stage, L. (2003) : « Les valeurs modales du futur et du présent », M. Birkelund et elii (éds.) *Aspects de la modalité*, Niemeyer, pp.203-216.
- Sthioul, B. (1998) : « Temps verbaux et point de vue », J. Moeschler (dir.) : *Les temps de l'événement*, Kimé, pp.197-220.
- Sten, H. (1952) : *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Munksgaard.
- 菅田茂昭 (2019) : 『ロマンス言語学概論』早稲田大学出版部.
- Togeby, K. (1953) : *Mode, aspect et temps en espagnol*. Munksgaard.
- Togeby, K. (1985) : *Grammaire française*, 5 vols, Akademisk Forlag.
- Touratier, Chr. (1996) : *Le système verbal français*, Colin.
- Vet, C. (2003) : « Attitude, vérité et grammaticalisation : le cas du futur simple », M. Birkelund et elii (éds.)

- Aspects de la modalité*, Niemeyer, pp.229-239.
- Vet, C. et B. Kampers-Manhe (2001) : « Futur simple et futur du passé : leurs emplois temporels et modaux », P. Dendale et L. Tasmowski (éds.) : *Le conditionnel en français*, Université de Metz, pp.89-104.
- Vetters, C. (2001) : « Le conditionnel : ultérieur du non-actuel », P. Dendale et L. Tasmowski (éds.) : *Le conditionnel en français*, Université de Metz, pp.169-207.
- 渡邊淳也 (1998) : 「他者の言説をあらわす条件法について」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』13, pp.109-155.
- Watanabe, J. (2001) : « Le conditionnel du « discours d'autrui » », *Etudes de langue et de littérature françaises*, 78, pp.216-230.
- 渡邊淳也 (2004) : 『フランス語における証拠性の意味論』早美出版社.
- 渡邊淳也 (2006) : 「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法との対照研究」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 50, pp.41-84.
- 渡邊淳也 (2007 a) : 「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法」『フランス語学研究』41, pp.54-59.
- 渡邊淳也 (2007 b) : 「間一髪半過去のめぐって」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 52, pp.151-175.
- 渡邊淳也 (2008) : 「分岐的時間の表象を用いた時制・モダリティの連関の説明の試み」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 54, pp.15-44.
- 渡邊淳也 (2009 a) : 「時制とモダリティの連関への新たな接近法」『フランス語学研究』43, pp.77-83.
- 渡邊淳也 (2009 b) : 「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化・文法化について」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 55, pp.123-144.
- 渡邊淳也 (2011) : 「ジェロンディフと現在分詞について」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 60, pp.121-181.
- 渡邊淳也 (2012) : 「叙想的時制と叙想的アスペクト」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 61, pp.191-234.
- 渡邊淳也 (2013 a) : 「単純未来形と迂言的未来形について」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 62, pp.69-106.
- 渡邊淳也 (2013 b) : 「主語不一致ジェロンディフについて」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 63, pp.95-178.
- 渡邊淳也 (2014 a) : 『フランス語の時制とモダリティ』早美出版社.
- 渡邊淳也 (2014 b) : 「叙想的時制、叙想的アスペクトと認知モード」春木仁孝・東郷雄二 (編) 『フランス語学の最前線』2, ひつじ書房, pp.177-213.
- 渡邊淳也 (2014 c) : 「En attendant について」『フランス語学研究』48, pp.85-93.
- 渡邊淳也 (2014 d) : 「前未来形のモデルな用法について」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 66, pp.35-56.
- 渡邊淳也 (2015 a) : 「Ceci dit, cela dit について」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 67, pp.99-120.
- 渡邊淳也 (2015 b) : 「Essuie-tout の意味論」『外国語教育論集』筑波大学, 37, pp.75-88.
- 渡邊淳也 (2015 c) : 「論証的ポリフォニー理論をめぐって」川口順二 (編) 『フランス語学の最前線』3, ひつじ書房, pp.275-304.
- 渡邊淳也 (2015 d) : 「主語不一致ジェロンディフと認知モード」『フランス語フランス文学研究』日本フランス語フランス文学会, 107, pp.155-169.
- Watanabe, J. (2015 e) : « Gérondif non-coréférentiel », *Voix plurielles*, 12, 1, pp.207-224.
- 渡邊淳也 (2016) : 「En passant の文法化・語用論化について」大久保朝憲ほか (編) 『パロールの言語学』日本フランス語学会, pp.153-167.
- 渡邊淳也 (2017 a) : 『ジェロンディフと現在分詞の意味論・語用論』デザインエッグ.
- 渡邊淳也 (2017 b) : 『コルシカ語基本文法』早美出版社.
- 渡邊淳也 (2017 c) : 「フランス語および西ロマンス諸語における「行く」型移動動詞の文法化について」早瀬尚子・天野みどり (編) 『構文と意味の拡がり』くろしお出版, pp.223-245.

渡邊淳也 (2018 a) : 『叙法の謎を解く』 白水社.

渡邊淳也 (2018 b) : 「フランス語大過去形の特徴的用法について」『筑波大学フランス語フランス文学論集』 33, pp.81- 112.

渡邊淳也 (2018 c) : 「フランス語の語彙の操作性とアフォーダンス」『ロマンス語学研究』 日本ロマンス語学会, 51, pp.1-10.

渡邊淳也 (2019) : 「フランス語の条件法現在形・条件法過去形とロマンス諸語における対応形式の対照研究」『筑波大学フランス語フランス文学論集』 34.

渡邊淳也 (近刊) : 「フランス語半過去形と叙想的時制・叙想的アスペクト」 定延利之ほか (編) 『テキストと時間』 ひつじ書房.

渡邊淳也・小川紋奈 (2018) : 「フランス語の単純未来形・前未来形とロマンス諸語における対応形式の対照研究」 渡邊淳也・和田尚明 (編) : 『諸言語における TAME の発現について』 筑波大学 TAME 研究会, pp.59-82.

Weinrich, H. (1964) : *Tempus*, Kohlhammer.

Wilmet, M. (1976) : *Etudes de morpho-syntaxe verbale*, Klincksieck.

Wilmet, M. (1997) : *Grammaire critique du français*, Hachette.

Yvon, H. (1952) : « Faut-il distinguer deux conditionnels dans le verbe français? », *Le français moderne*, 20, pp.249-265.